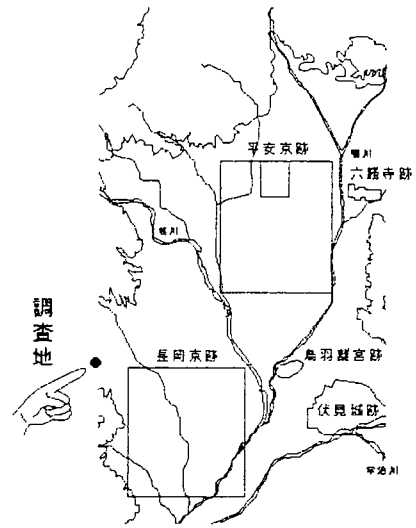


下西代古墳群発掘調査

現地説明会資料



しもにしだい
下西代古墳群発掘調査現地説明会資料

1990/09/15

所在地 京都市西京区大原野南春日町

調査期間 1号墳 1989年6月5日～8月11日、2号墳 1990年7月2日～継続中

調査面積 1号墳 500m²、2号墳 500m²

調査主体 (財)京都市埋蔵文化財研究所

1 はじめに

大原野地域で調査が本格的に開始されたのは、圃場整備事業に伴う1982年の大原野全域を対象とした遺跡確認のための分布調査からです。翌年の1983年～1985年には分布調査の成果に基づき試掘調査を実施し、新たな遺跡を多数発見しました。1986年からは、毎年発掘調査を行ない、数多くの遺構・遺物を発見しました。現在までに調査次数は20次を経過しています。

2 下西代古墳群の発見にいたる経緯

1989年3月16次発掘調査を実施した。当調査では平安時代後期から室町時代の建物跡を検出したが、さらに大原野地域では初めての井戸跡を2基も検出したことから、遺構の広がりを確認するため一部拡張を行った。その結果、当初から予想しなかった古墳の主体部である横穴式石室を検出することができた。石室下半部はきわめて残存状況が良好で、また周辺の地形等の状況から墳丘についても、裾部が残存している可能性が高いことから、1989年6月発掘調査に入った。その結果、墳丘及び石室の上半部を削平されていたが、古墳時代後期の円墳であることが判明した。名称については、当該期の古墳は単独ではなく、数基以上集中して築造される群集墳であると判断し、当地の小字名から下西代古墳群とし、当古墳を1号墳とした。

同年10月19次調査と並行して、1号墳周辺にあたる下西代地区を中心に、新たな古墳確認のため10箇所を試掘調査(18次)を行なった。その結果、1号墳東50mの地点で石室の石材を確認したことから、古墳が近辺に予想されたため発掘調査となった。1990年7月2日から調査(20次)を開始し、1号墳と同様、石室や墳丘上半部は、削平をうけていたが、残存良好な横穴式石室を検出し、当古墳を2号墳とした。現在調査継続中である。

3 下西代古墳群の概要

1号墳

- 墳 丘** 形状は円形で、その規模は直径が裾部で18m、周溝心部で20m、高さは不明である。盛り土の状況は地山面まで削平を受けていたため明確でない。
- 主 体 部** 横穴式石室である。石室の形態は、両袖式で玄室は胴張り状を呈する。規模は全長7.5m以上、玄室長3.0m、幅1.4~1.8m、羨道長4.5m以上、幅1.0~1.2mである。石室の主軸方向は、ほぼ真北である。掘形の幅は8.0~9.0m、深さは地山面から1.4mである。
- 周 溝** 主に丘陵側で明瞭に認められた。幅1.0~1.9m、深さは0.5m前後ある。断面の形状はU字形を呈する。墳丘をめぐる周溝の形状は、やや楕円形で、石室を直交する方向にやや広がる。埋土には部分的に炭層も含まれていた。
- 出土遺物** 石室内から多量の遺物が出土した。遺物の出土状況をみると、玄室では奥壁東近くで金環が、さらに奥壁基底石と東壁基底石の間から銀環が出土した。羨道では玄室との境界北半と南半閉塞石近くに集中する。
- 玄室：須恵器（杯身・蓋、短頸壺、長頸壺）、土師器（鉢、甕）、金環、銀環、鉄釘、鉄鏃、馬具
- 羨道：須恵器（杯身・蓋、高杯、短頸壺、長頸壺）、土師器（短頸壺、長頸壺、甕）
- 周溝：須恵器（杯身、高杯）

2号墳

玄室に小石室をもつ特殊な古墳であることが判明した。

- 墳 丘** 形状は円形で、その規模については、東側で現水田畔が、当墳丘裾部を踏襲していると判断し、西側では周溝の一部を検出したことから直径20mと推定、高さについては不明である。
- 主 体 部** 横穴式石室である。石室の形態は両袖式であるが、玄室はやや胴張り状を呈する。さらに特殊なことに、玄室内に小石室を構築している。
- 規模は全長13m以上、玄室長は西袖石部では3.8m、東袖石部では3.9m、幅

規模は全長13m以上、玄室長は西袖石部では3.8m、東袖石部では3.9m、幅1.6~1.8m、羨道長8.2m以上で、石室の主軸方向は真北に対し西へ28°振れている。小石室は長さ2.6m、幅0.5m、高さ0.5mである。

小石室の奥壁は横穴式石室の奥壁と共有している。小石室西壁は3段積み、東壁は2段積みであるが、南側は石積みはなく平石2枚で閉塞されている。奥壁を除く周囲は礫混じりの粘土で固められ南側はなだらかな傾斜をもつ。小石室床面には隙間なく石が敷かれている。小石室の主軸方向も横穴式石室と同一である。

周 溝 西側北で一部検出したにとどまった。幅0.9m、深さ0.15m。

出土遺物 石室内から出土した。遺物の出土状況をみると、床面からはわずかで、ほとんどが埋土下層から出土している。

玄 室：須恵器（杯身、短頸壺、高杯、提瓶）、土師器（壺）

小石室：金環、鉄製品

羨 道：須恵器（杯身・蓋、短頸壺）、金環、銅環、鉄製品（刀子）

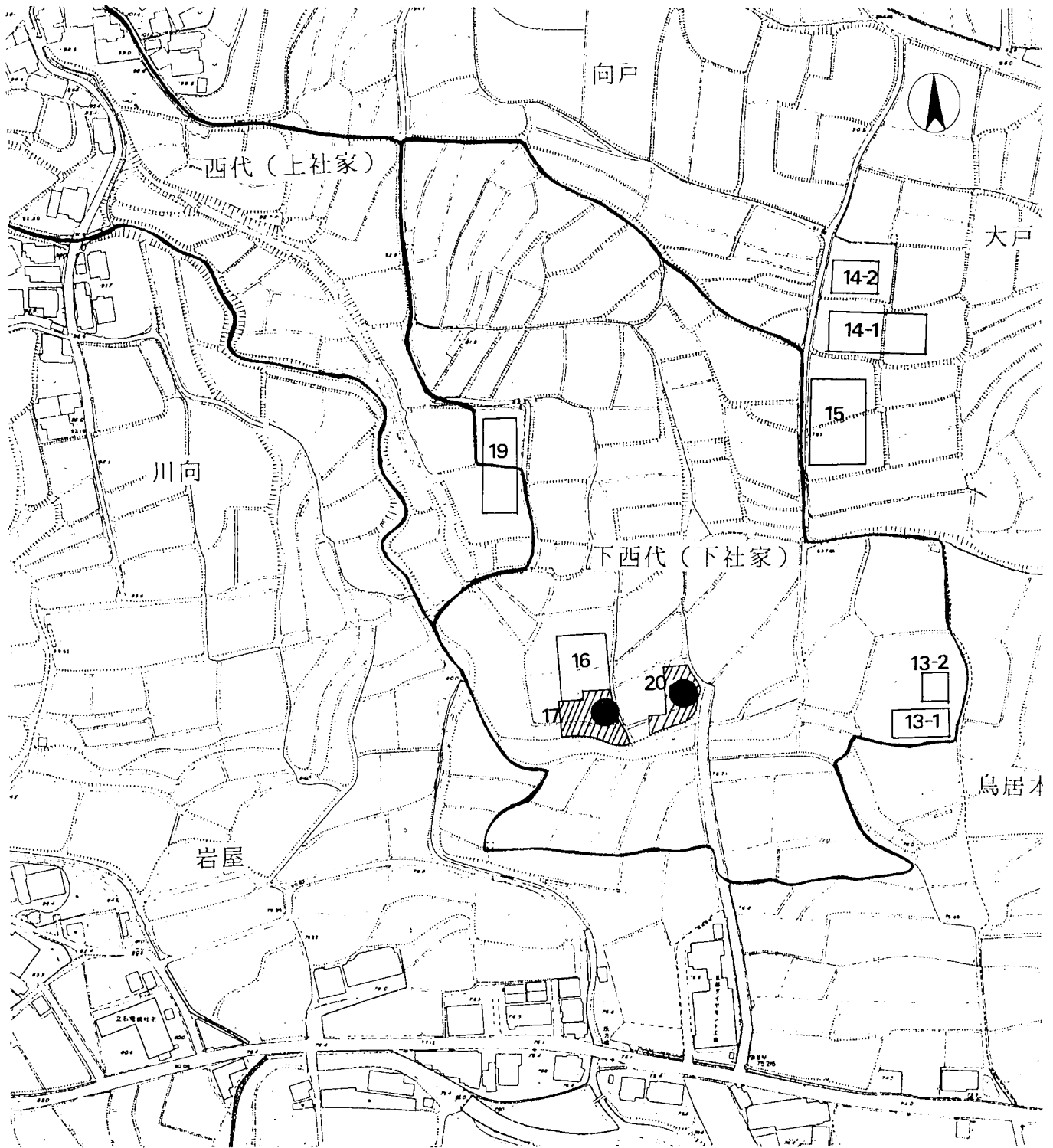
古墳時代の遺物とは別に、土師器皿、須恵器蓋、灰釉陶器、平瓶、瓦器椀が出土している。

4 まとめ

今回の調査は大原野地域の古墳群としては初めての本格的な調査です。その結果、2基の古墳を新たに発見し、特に2号墳は、主体部である横穴式石室に小石室をもつ全国でも類例のない特殊な古墳時代後期の円墳であることが判明した。本例は群集墳が盛行するこの時期の葬送儀礼を再度検討する、あるいは一形態として付加し得る貴重な例となるものであろう。

小石室については、従来の横穴式石室を構築した後、築いており前後がある。追葬の可能性が高いが、小石室には時代確定できる遺物の出土がなく、確証は得られなかった。

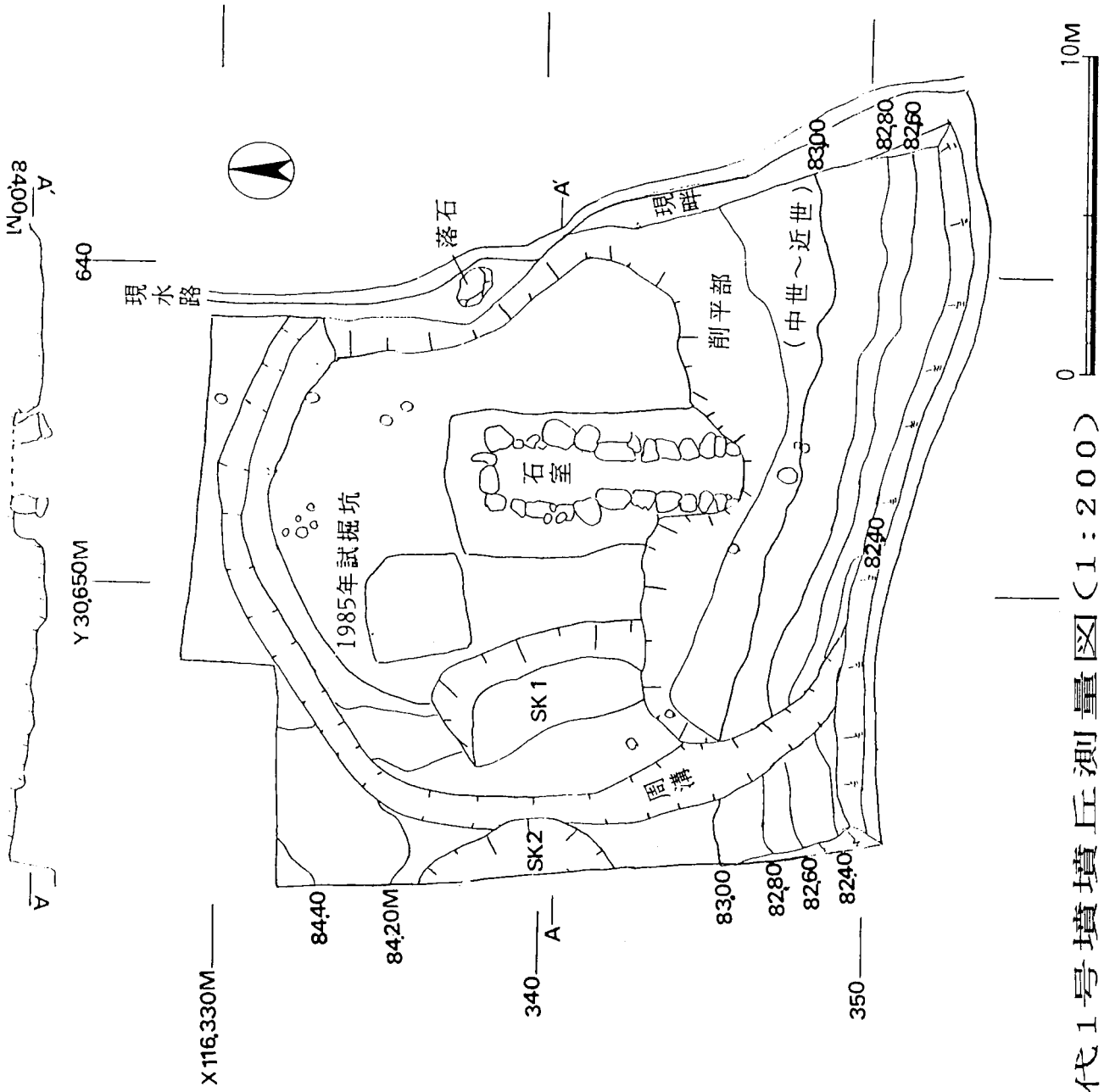
また1号墳については、主体部である横穴式石室の形態、出土遺物の内容から6世紀末に築造され、その後2回以上の追葬が行なわれたことが判明した。このような古墳は、京都市内の当時期の群集墳に一般的に見られるもので、未調査である周知の大原野一帯の古墳群を解明する上で重要な資料と言える。



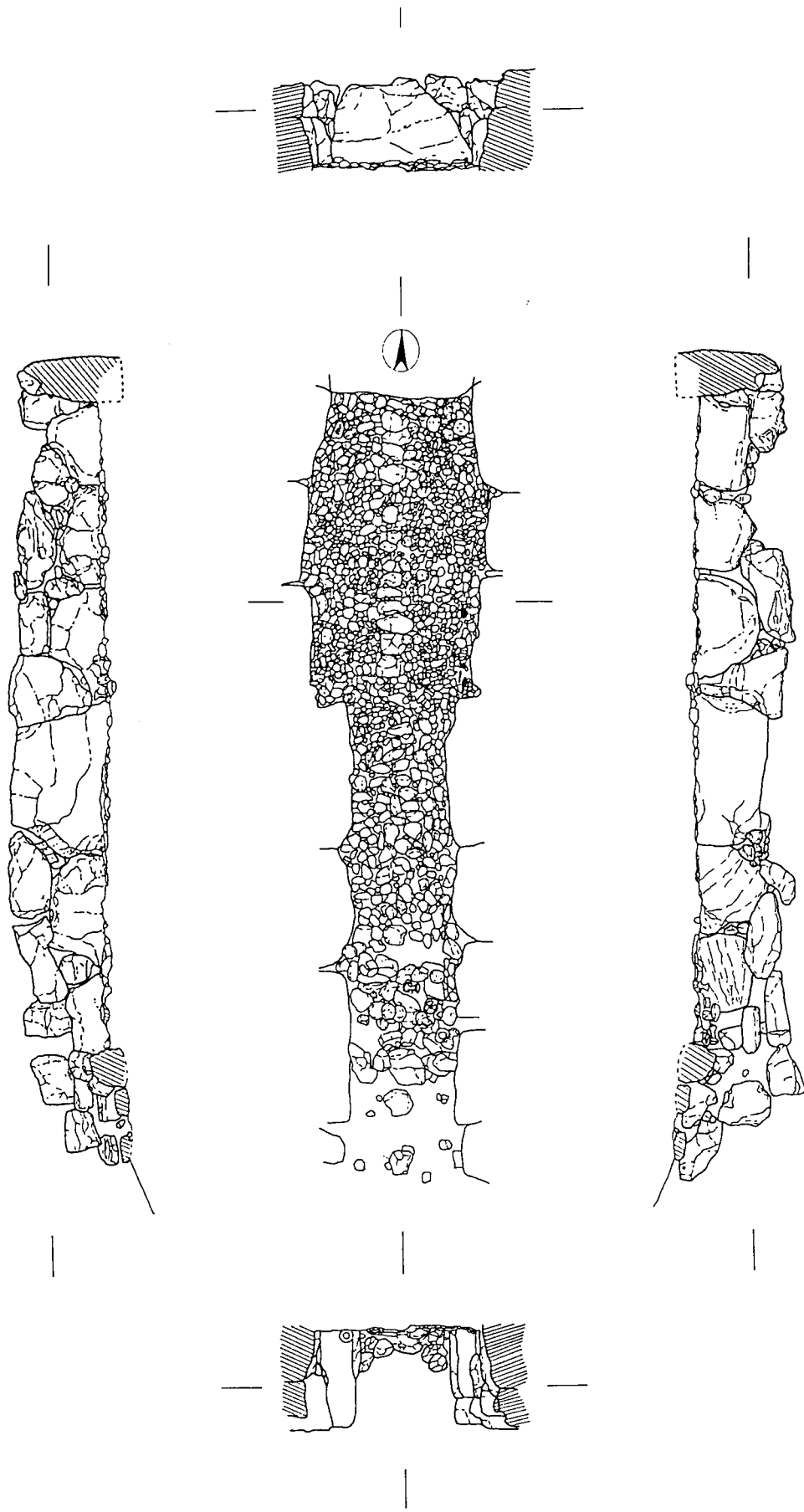
下西代古墳群調査位置図（1：2500）

斜線の部分は下西代古墳群の調査地（17次、20次調査）を示す。

その他の数字は各調査次数を示す

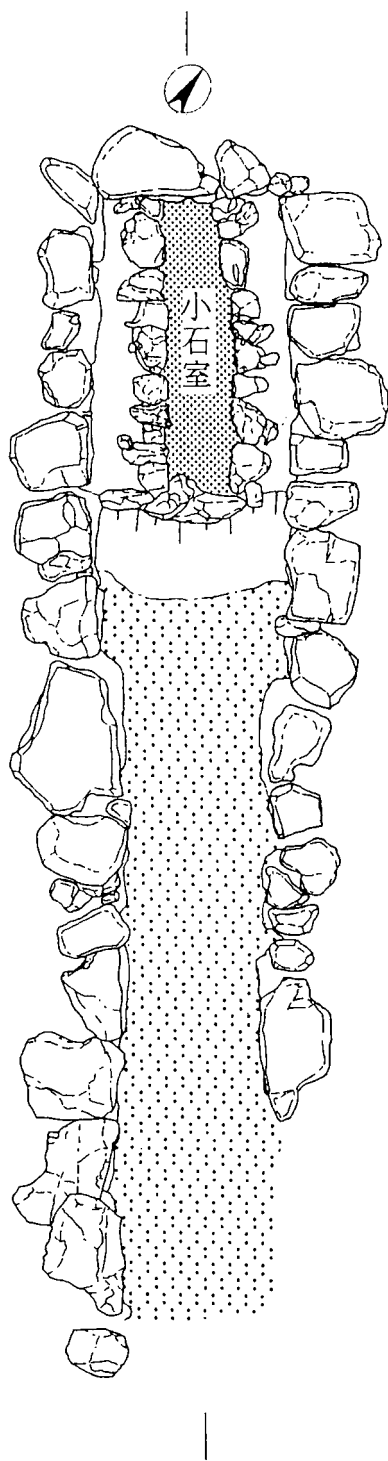


下西代1号墳墳丘測量図(1:200)



下西代1号墳石室実測図

0 3M

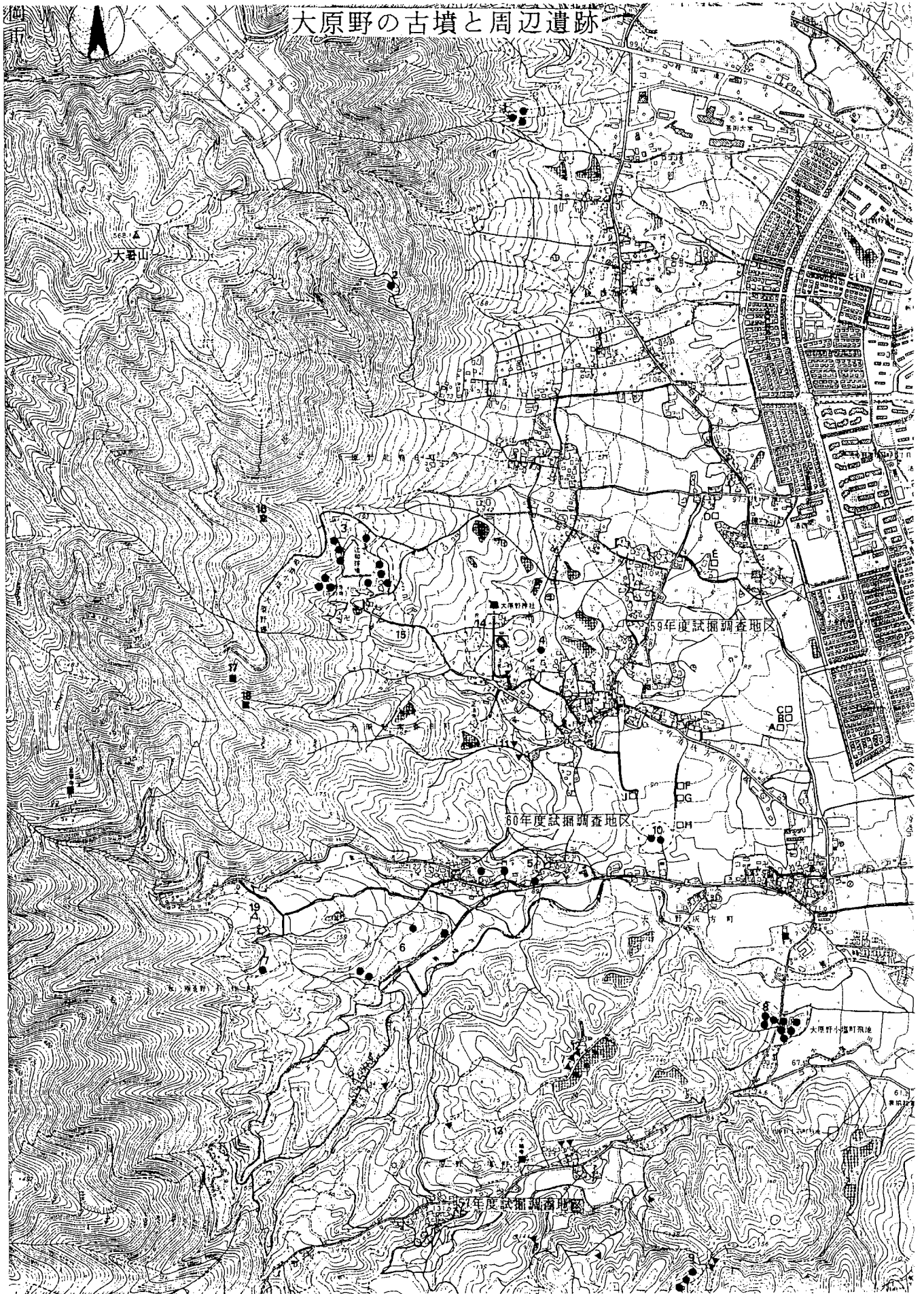


0 3M

下西代2号墳石室模式図

網目は床面の石敷き

大原野の古墳と周辺遺跡



大原野の遺跡一覧

番号	遺跡名	時代	遺跡の概要
1	古墳群	古墳後	丘陵の果樹園に石室石材が散在。
2	大畧山古墳	古墳後	標高315mに位置する円墳。
3	勝持寺古墳群	古墳後	寺境内、裏山、グラウンド周辺に点在。現在までに円墳11基確認。
4	大原野神社 東方古墳	古墳後	神社旧領域の竹林に石室石材が露呈。円墳。
5	八幡宮古墳群	古墳後	長峰八幡宮本殿下に横穴式石室1基。東民家下に石室石材残存。西方1基は全壊。
6	円山古墳群	古墳後	4基とも破壊顕著。石室基底部分一部残存していた1基を1985年調査。
7	丸尾古墳	古墳後	棚田上に横穴式石室が1基完存。
8	灰方古墳群	古墳後	円墳9基点在。竹林に位置し、土取り等のためほぼ全壊。
9	古墳群	古墳後	標高150～200mの石作町山地に円墳4基点在。
10	下西代古墳群	古墳後	1989年3月調査で拡張際、耕作土直下に横穴式石室1基を確認。同年5月調査。さらに11月調査で泉50m地点に1基確認。
11	南春日町窯跡	奈良	全壊。1980年調査。84年試掘調査では南東200mの地点、現耕作地で当窯跡に隣連する竪穴住居（作業場か）を検出。
12	明治池窯跡群	平安前	明治池に面した丘陵東南斜面に須恵器窯3基以上点在。
13	大原野窯跡群	平安	石作町から小塩町にかけて広がる丘陵に点在する須恵器、緑釉陶器窯跡。1982年試掘調査で新たに1基確認。
14	大原野神社遺跡	先土器 平安	散布地。神社境内に石器、土器、瓦が散布している。
15	勝持寺中世遺跡	中世	散布地。山腹斜面に土師器、瓦器を含む遺物包含層を確認。
16	散布地	先土器	当地点で有舌尖頭器が採集されている。
17	散布地	奈良	標高300mの地点。土師器、緑釉陶器、炭化物採集。祭祀跡か
18	散布地	平安	社家川上流の地点。巨石群周辺に土師器破片散在。
19	いかり 磐座か	不明	石作町の棚田に、高さ2m以上の巨石確認。

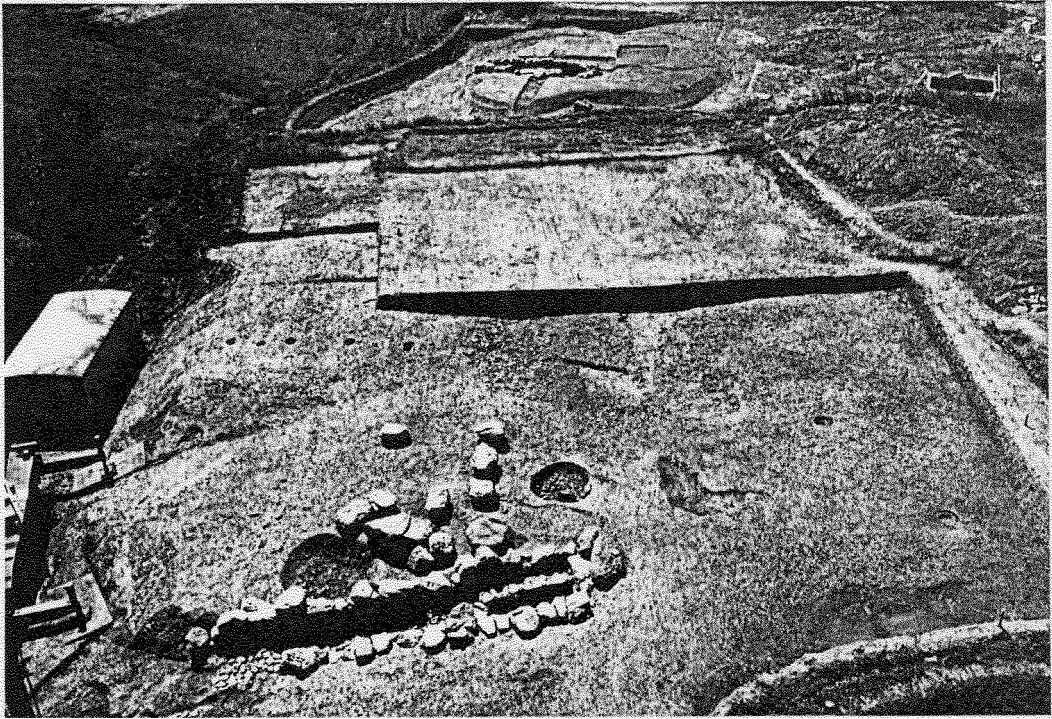


写真1 1・2号墳全景（東より、手前が2号墳）



写真2 1号墳全景（南西より）

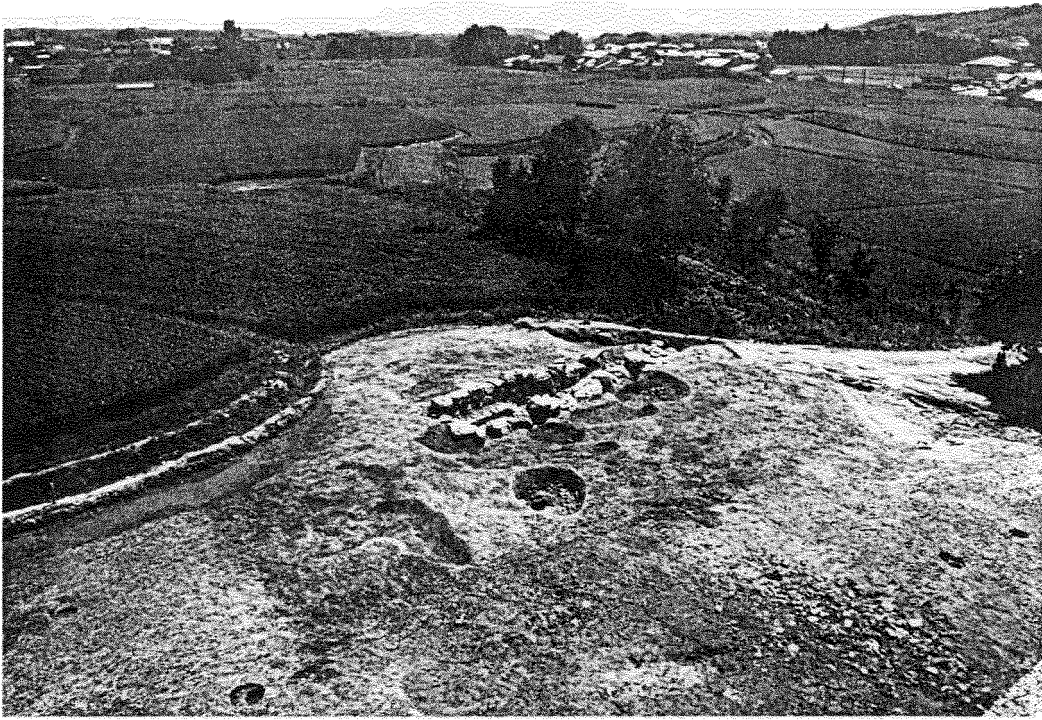


写真3 2号墳全景（北西より）



写真4 2号墳小石室（南より）